

第5回 新型コロナウイルス感染症とアジア

年間最大のイベントとして、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年が明るい希望を持って明けたと思いきや、中国を震源とする新型コロナウイルス感染症が瞬く間に全世界を覆い、「第二次世界大戦以来最大の世界的危機」(グテレス国連事務総長)の渦中にある。しかも、このPandemic(感染症の世界的蔓延)がいつ頃に終息するのも全く見えず、一部の予測では2022年まで外出自粛等の措置が必要としている。

過去の歴史でも、欧州を中心に14世紀に蔓延したペスト(黒死病)や19世紀のコレラ、約1世紀前のスペイン風邪等のPandemicがあったし、1960年頃から出て今も感染が続いているHIV/AIDSがある。

21世紀に入ってからSARS、MERS、エボラ出血熱等があり、まさに人類は感染症との戦いの歴史と言っても良い。

表1 中世以降に発生したPandemic

年	感染症・病原体	地域	死亡者数	備考
1347-1351	ペスト(黒死病)	ユーラシア	ヨーロッパ人口の3~5割	ヨーロッパの封建制崩壊を早めたか
1500年代前半	天然痘	アメリカ大陸	地域によっては5割以上	アメリカ大陸先住民の社会を破壊か
1881-1896	コレラ	世界的	150万人以上	史上5回目のコレラ・パンデミック
1918-1920	スペインかぜ	世界的	3千万~1億人	このインフルエンザで世界人口の2~5%が死亡、第1次世界大戦の死者をはるかに上回る
1957-1958	アジアかぜ	世界的	100万~200万人	インフルエンザ
1968-1969	香港かぜ	世界的	50万~200万人	飛行機の発達により感染が大規模に拡大した最初のウイルスか(インフルエンザ)
1960-現在	HIV/AIDS(エイズ)*	世界的(主にアフリカ)	3500万人	HIVが最初に発見されたのは1983年、最初の症例は1959年に採取した血液サンプルから発見
1961-現在	コレラ	世界的	年間2万1千~14万3千人	近年のアウトブレイクの例:ハイチ(2010-)、イエメン(2016-)など
1974	天然痘	インド	2万6千人	その後、1977年のソマリアの患者を最後に根絶に成功

https://darwin-journal.com/pandemic_history

表2 21世紀以降に発生した Pandemic

年	感染症・病原体	地域	死亡者数	備考
2002-2003	SARS*	中国から37カ国に拡大	774人	新型コロナウイルスが原因、国際的なビジネス旅行によって大陸をまたいで急速に拡大
2009	豚インフルエンザ	世界的	28万4千人	メキシコでは感染拡大防止のために早期に各種機関が閉鎖
2012-	MERS*	22カ国	659人	新種のコロナウイルスが原因
2014-2016	エボラ	西アフリカ	11,325人	この後、30万接種量の実験的ワクチンを備蓄
2015-現在	ジカ	アメリカ大陸	死者は報告されていない	妊婦が感染すると出生異常が起こりうる
2016	デング	世界的	3万8千人	デングのアウトブレイクは周期的に発生しているが、2016年は例外的に世界規模に
2017	ペスト	マダガスカル	209人	ヒトからヒトに移りうる肺ペストが増加
2019-現在	COVID-19/ SARS-CoV-2	?	?	新型コロナウイルスが原因

https://darwin-journal.com/pandemic_history

新型コロナウイルス感染症は飛沫感染、接触感染なので人と人との接触を回避するのが最大の感染防御であり、日本でも「緊急事態宣言」が4月7日に発出された7都府県(その後、16日には全都道府県に拡大)では「80%の接触減」が求められている。要は人の外出、移動、集合を控える事で接触を減らす事が求められている訳だが、それにより当然経済活動に大きな影響を与える事になる。

報じられているように、多数の感染者、死者を出しつつある欧米諸国では外出や移動を禁止して違反者には罰則、罰金を科す措置を実施中である。

アジア地域でも日本を始め、全地域で蔓延が進行中で人の行動制限が各国で行われている。また、国外からの入国制限も全地域で行われている。

4月15日時点でのアジア各国の感染状況は表3の通りである。

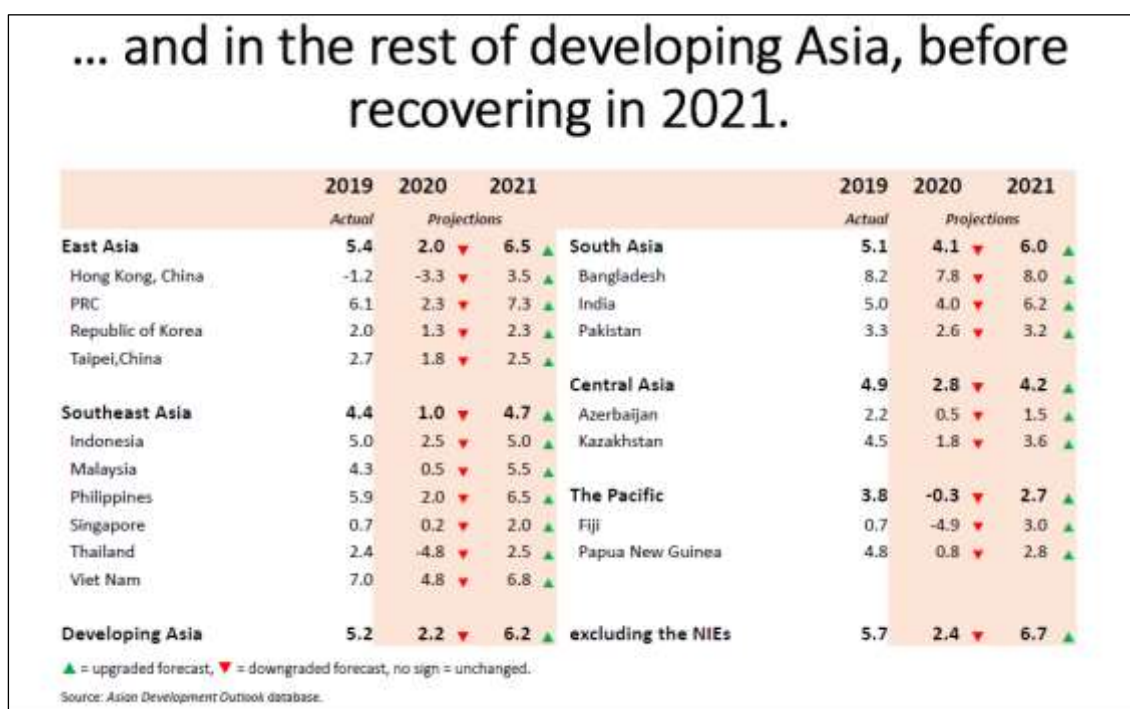
感染拡大を抑え込んだと見られるのは台湾とベトナム(中国は第二波が懸念されている)だが、16日時点では日本以外ではインドネシア、フィリピン、インドでの拡大が増加傾向にある。また、タイでも一時期の拡大ペースは鈍化してはいるものの医療崩壊(ICU ベッドの不足)の懸念も出始めており、日本同様に無症状・軽症者のホテルへの収容も検討されている(観光客の大幅減でホテルはがら空き状態)。

表3 アジア各国の新型コロナウイルス感染状況

アジア各国の新型コロナウイルス感染状況(2020年4月15日時点)								
国名	感染者数	前日比(プラス)	死亡者数	前日比(プラス)	致死率	回復者数	前日比(プラス)	回復率
日本	7,645	275	143	20	1.87%	799	15	10.45%
中国	83,306	93	3,345	0	4.02%	78,200	161	93.87%
韓国	10,564	27	222	5	2.10%	7,534	87	71.32%
台湾	393	0	6	0	1.53%	124	15	31.55%
シンガポール	3,252	334	10	1	0.31%	611	25	18.79%
インドネシア	4,839	282	459	60	9.49%	426	46	8.80%
タイ	2,613	34	41	1	1.57%	1,405	117	53.77%
マレーシア	4,987	170	82	5	1.64%	2,478	202	49.69%
フィリピン	5,223	291	335	20	6.41%	295	53	5.65%
ベトナム	266	1	0	0	0.00%	169	23	63.53%
インド	11,487	1,034	393	35	3.42%	1,369	178	11.83%

このように全世界の人の活動が前例のないくらいの規模で制限されているのでそれは経済にも巨大な負のインパクトを与える事になる。

ADB(アジア開発銀行)はアジア各国のGDP成長率の見通しを4月初めに発表している。



この表からはいくつかの事が言える。

- ①東・東南アジアで20年の成長率がマイナスに落ちる国は、タイ及び香港。
特にタイは19年に比べて△7.2%と極めて大きなインパクトが予想されている。これは経済を支える大きな柱である観光業が壊滅的な影響を受けている事やGDPの30%を占める製造業のうち、最大の自動車産業も工場停止等による大きな影響を受けている事による。
- ②中国は19年の6.1%から20年は2.3%への落ち込みが予想されている。
本年第一四半期(1-3月)はマイナス成長が予想されるが、残りの9か月で大きく復調が見込まれるのであろう。中国は今やGlobal Supply Chainの大中心地であるので、その動向は世界経済全体に大きな波及効果がある。
- ③大半の国が19年の成長率の半分以下に落ち込む事が予想される中で、30%減程度で収まる事が予想されているのがベトナム(7.0%→4.8%)である。今回の感染症でもいち早く中国との国境封鎖に踏み切った事が奏功してか、感染者を極めて少なく抑え込み、また死者も未だにゼロとなっている。(表3参照)
- ④アジア全ての国が21年は成長率が20年より上向くと予想されている。但し、これは感染症が程度の差はあれ収束されるとの前提である。治療薬やワクチンの開発が待たれる。

今回の全世界的な感染症の蔓延が収束された後の世界がどのようなものになるか未だ予測すらつかないが、これまでの常識を覆すような巨大な変化(経済のみならず。政治、安全保障、文化等人々の行動変容を伴う全面的な)が起きる事は十分に想像し得るものである。